

暴徒潛入

何を以てか之れを遣ふ、  
韓民の群をなし、銃を發ひ、劍を帶ひ村間に  
に出沒して人命を傷ひ、尙食金品を強請る  
去る故にして群を暴徒と云ふ、然れども今世  
の暴徒にして群を解き、劍を抛り、銃を棄  
て、烟管を手になせば、所謂良民と相異せる  
點何處にかある、暴徒の我討伐隊及警察官  
の監視界を脱せんは斯くの如く易かり、  
若し夫れ各地に屹峙せる暴徒が最後の目的  
我独政治の手緩きを悔み、皇帝を挟ん  
天下に號令し、斯くして列國の干渉をし去  
アツく我が日本の保護國外に脱出しま  
びざるはありませしめ、勢を分ちて一  
に其同志を潛入させしめ、勳を分ちて一  
は有り得べき理にして、又最も行ひ易  
策なれば也。

由是觀之、暴徒を數京城に潛入せりと傳  
る邊説の説は、決して漫に怯者の虚言と  
み聞流す事にはあらず、少くとも萬一  
變に處する用意あるべからざる也、惟  
に實に當る當局者の胸中、必ず已に之れ  
處する成竹あるべしと雖ども、予は軍隊  
散當時四十年八月一日、當局者其の自  
れたる見解、よりして見苦しき狼狽の狂態  
驅逐したるに、至り、甚だしく發憤の念  
さ能はざるものなり。

記者足下、當局者の胸中此の用意ありと  
するや否や。

韓國及東南滿洲旅行談(續)

した某林學士が、この上流地方を

踏査しま

萬後  
里  
河子  
三  
七五〇  
二  
六四〇  
八割半強  
八割半強  
六割半強

九  
十  
十一  
十二  
十三  
十四  
十五  
十六  
十七  
十八  
十九  
二十  
二十一  
二十二  
二十三  
二十四  
二十五  
二十六  
二十七  
二十八  
二十九  
三十  
三十一  
三十二  
三十三  
三十四  
三十五  
三十六  
三十七  
三十八  
三十九  
四十  
四十一  
四十二  
四十三  
四十四  
四十五  
四十六  
四十七  
四十八  
四十九  
五十  
五十一  
五十二  
五十三  
五十四  
五十五  
五十六  
五十七  
五十八  
五十九  
六十  
六十一  
六十二  
六十三  
六十四  
六十五  
六十六  
六十七  
六十八  
六十九  
七十  
七十一  
七十二  
七十三  
七十四  
七十五  
七十六  
七十七  
七十八  
七十九  
八十  
八十一  
八十二  
八十三  
八十四  
八十五  
八十六  
八十七  
八十八  
八十九  
九十  
九十一  
九十二  
九十三  
九十四  
九十五  
九十六  
九十七  
九十八  
九十九  
一百

道館に至るまでの戸籍人口表があらわす  
に類する貴重な資料でござります。その調査  
に衣によりとすと、**韓国籍**には一人の清人が  
無いのに対して、**朝鮮山**以東の各道溝の管  
流に沿って韓人が清地に移住するもの約一  
千七百二十人て、**總人口**の殆ど四割に當  
てて居ります。今假りに國境を撤して兩岸の  
土地を一丸に見做したならば、**韓人の清人**

[illegible]

一上流地方を鴨綠江、これは其右岸鴨綠江の頭道溝より廿一道溝に至るまで、松花

第二に超過するものが約五倍に達すると云ふ事は、元山實となりませう。

昨年（一九〇七年）中に於ける列國造船界の

前同此處に述べた五聯の  
餘り少數なり其の間に取  
りて之を五聯と爲す。例より  
簡便と有るの必要あり。

今この如き不<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>問題は起らず、總て  
者は彼れが祖國の名<sup>義</sup>と英雄の面目と  
發揮したることを承認せしむるべし是

の清糸は、頻ど衣紋を結ぶながら、  
を、いやモウ、それは傷るまでもございま  
れん、私が中に入つて居りますから、其

せ、何の見送みおくなんかいふものか」  
かくて、大川は翌日韓國へ向は出發し

茲に旅順要塞が未だ完く落成に至ざりし  
ことを記せざるべからず。然り二年間  
於て要塞を築くを得ざりし。此の事を  
解せんが爲には、シムラツ中佐の善美英  
の功等を調査する上に十分なり。シメ  
ツルツは口へ旅順の範圍を以てすれば  
其の砲成兵は十二萬五千八百人、砲成せし  
れざることが知らず。是れは勿論多數に爲

自分とスミルノシ及び太守の許可なく  
乃木大將と談判したりとの十二月十  
日(一月一日附)の電信は降参する如  
告と同時に着いた。斯の如くにして更  
敢なる防衛に終りを全うせざりき。終  
に本隊人は尚一書を添へん。若し命令  
犯したるステテセルを將軍にして、旅順  
勇戦なる防衛を最後迄守りしべから

場合でなくつたのであつた。取れども、大川もさるもの、清糸に向くは、そとに  
は御くまで金を推し、  
「あの肺病が間に入つて、乾度六ヶ月の養生を  
要する」と云ふやうに、待遠けれど夫と辛  
抱して待つて居るから、勇五郎にも其事  
の能く言ふて、必ず異約せんやうに念を推  
して置いて下さい。」

してございまして、熱心に説く、大川は心中で冷笑ひつゝ、  
「賢く考へて見やうが、若し往  
事になると、黙つて行くからは、男五郎  
も清之助にも師匠から能く理由を話して  
下されう。」  
「服部事件ではないで、急に人來しやる  
が、私だけの話で返す致し方ありませんか

露國	一三〇	一〇七、〇〇〇	四四、四〇〇
瑞典國	一四一	一七五、七五七	五五、五〇〇
西班國	二〇	一五五、七五七	六五、五〇〇
清國	二〇	一四、四〇〇	一、四〇〇
泰國	二〇	四、六八〇	二、〇〇〇
暹羅國	一五〇	一五〇	一五〇

我日本國は一昨年に比し十一變、三萬四千六、百二十噸の増加を見る

## ステツセル裁判

（云）

クロボトキン將軍は尙續いて曰く

「ステツセルに對する本證人とアレクセー」

（十五日）コンドラチンヨの死したる日迄

「エツの信認の至當なりしとは十二月二日」

「來は長き困難の時期を経過したり吾人は」

「今を證明せられたる」此日に至る迄要する

「吾人の死するに二条件あり。一は打電して、防禦者等に彼を要するの機に於て殺さんと謀れることを報告したり。十一月廿七日十二月十日コンドラテンコの死する僅かに五日前に於てすらステツセルは本隊人に打電して「兵員は疲弊したりと雖も、士氣尚壯烈なり」と報告したり。吾人は彼處にステツセルを留置したることに於て何等惜むべき所なくして吾人は又同時に次の如き報告に接したん曰く艦隊との反目は消滅して、艦隊はバスターボリに於けるが如く、其の砲撃、彈藥、水兵及び將校を供與したりと。然れどもスミルノ將軍よりステツセルは

ふに、豫て有ゆる手段を盡して運動しつゝあつた、韓國の鐵道敷設の受負が、運動の効空しからずして、其の手續に落ちたうゑ既に渡韓しなければならぬ事に立至つたのである。謂は此の受負は大川が畢生の事業で、身代を償ふるも預すも受負事業の成敗如何にあるので、總ひ焦れた濟の助なり、なかり怒りと糾纏がまして居られ

附かない内こそ氣も揉めますけれど、毛虫  
 こう約束が整ひました上は、内地に居ら  
 せてチヨク／＼の遊に入來しやる方、初  
 つてね樂みではございませんか那様御座  
 (入來しやるど、私始め濟之助も甚  
 便なくならぬや知れや致しません。どう  
 ア那樣事を仰やらないで暫くの御辛抱で  
 ございますから、なります事なら内地に居

[illegible]

隊の痛く萎縮したる事とは一層旅順防禦の任務を困難にしたり。然れども本隊人は其の防禦が五箇月の間勇敢に遂行せしことを殊に證明せざる可からず。遼陽戦争の日、敵を撃退したりとのスツアツルよりの公使は明かに滿洲の勇氣を鼓舞したり。軍隊は之を聞きつゝ「クラー」を連呼したり。七月十七日(三十日)に至りて始めて區域の消滅すると共にスツアツルの責任を解かれたり。然れども當時スツアツルは

立 春 信 天 翁

葉枯せし柳の糸のみたるよは  
今日立つ春の風や吹くらん

テツセルの報告は、衛戍兵の士氣勇壯にして斯かる防禦の局を見こななきを暗示したりの「スミルノフ」將軍はコンドラチン

何故と言ふ事と、敵んだのである。何故と言ふ事と、敵んだのである。何故と言ふ事と、敵んだのである。

「すだけれど貴方、海の物とも山の物とも」

其他の諸外國の造船（軍艦及び商船一切を含む）を一括すれば其總數は一千五百九隻、數は百四十三萬二千五百八十九噸、實馬力百三十三萬五千四百五十八なるが故に之を昨年の千二百七十七隻百三十四萬四千七百三十五噸、二百一十八萬三千三百四十六馬力に比し其增加數は三十二隻八萬七千七百七十四噸一萬七千七百二十馬力を示すものどもふべし而して殊に増加の顯著なるものは

と大連の許可なくして大連市を造營したる事なき。大連は敵の根據地として現れたる。本證人は其の當時、旅順を清國に襲り、大連を渡渡し、吾人は專ら滿洲に據るべく必要を述べたり。然るに吾人は餘りに多くの力を頼み過ぎたり。自己の艦隊の勝利を信じ過ぎたり。又旅順より三箇師團を引去りたる事と、一月二十七日（二月九日）敵艦の襲撃後我が艦

延保四年の秋、清和天皇は、  
 藤原朝臣の藤原を討つて、清和の助の朝へも  
 藤原の意見を述べて、清和から大津へ八歳  
 の延期を頼むで貰う事にし、清和も利益  
 のために延保で貰う事になりはなつたもの  
 のために延保の頼むる氣になつたもの  
 清和の助の頼を聞けば、有樂に人衆盛ん  
 を、このまゝ廢棄さすは、自分の勢力盛  
 衰に關はる心もするゆへ、男五郎の言が  
 まゝに、大川に會つて斯様々など、詳しく  
 事情を傳へて半歳の延期を請ふた所、表  
 面を不承で承知しなげ、裏面を表面

「追従笑をする。大川は故と失笑し、  
「今日か今日か、待つに待つ返答が、六ヶ  
月先と云ふので、ガツカリして丁つたから  
内地に居つて永い間待受けるより、  
時朝鮮にでも往て遊んで來やう。」  
酒桌は吃驚したやうに、  
「ハッ、朝鮮へ入來なさいますッて、  
「あゝ、内地に居つて相を折つて待つてゐる  
のも随分辛いから、少し彼地へ目的もある  
ので、主つて來る事を爲やう。」

兄を觀るに英、米、獨、和、日、佛の六大造國は一昨年一九〇六年に於ける地位を保持せるを知るを得、蓋し此六ヶ國實に世界造船の中心なるを認むべきと共、第二位を占むる米國と雖も英國に比すれば其差雲泥の如きものあるは數字の明證す所に、英國が海上王の名を損ふに、事偶然に非ざるを説すべきなり、今英國を

砲の缺乏は旅順の運前に大關係を有した  
り。吾人は舊式の大砲を供する能はざり  
き。舊式の火砲を取りとすれば西の方  
本國の軍需を薄弱にするの恐れあり、外  
國への注文は決定せられず、内國の工場  
は極めて微弱なりき。斯かる状況に於て  
吾人は何處より大砲を取るを得べかりし  
や。然れども最も主なる不幸は、本諸人

本證人の深く信じて疑はざる所なり。ト云へば、クバートキン將軍は其の證言を最も強  
く最も高く而して最も熱誠に終りたり。

車 説

絃のみたれ  
(八十四) 永井 櫻 國

男五郎は、清之助との相談の結果、早速赤  
毛の羽織を着て、早瀬赤

左や右言はすやうな事は致しません、勇五郎さんにも僅く彼目を推して置させます。日那、モウこゝまで事が成就したので、清の助は貴方の奥様も同様です、これからは、宅へちよく、お趣に往つてやつて下さいまし、然うすれば勇五郎さんも救ひます、清の助も心易くなつて、定て敵が事でおこなませう。」

-189-









●釜山出帆・元山行  
弘前丸 二月廿六日  
御乗船ノ際ハ税關波止場ヨリ本船送  
注送迎船ニテ御送リ可申候送迎船ハ本  
意船出帆ノ約五十分钟前ニ船解纜ノ事